

【研修報告】

第12回国際がん看護学会での発表を終えて

—がん患者の配偶者における病の意味—

野村美香*

はじめに

診断・治療技術の進歩に伴い、がんは長期生存が可能な病になりつつある。そのためがん患者は、診断された時から長期的な展望に立って、治療と生活を両立させるといふ課題に取り組むことになった。このことは、患者の配偶者にとっても、がん患者と共に長期にわたって病に取り組むという新たな課題が生じたことを意味する。しかし、コミュニティの脆弱化が指摘される現代において、この課題は容易なものではなく、患者より高度な気分障害が配偶者に起こるといふ報告もある (Northhouse, 1995)。また、患者が自らの身体症状に対峙しているのに比して、配偶者は患者の介護を通じて間接的に体験するので、患者のような前向きな開き直りが現れにくいという指摘もある (保坂, 1997)。

このように、診断・治療期にあるがん患者と共に生きるという課題の困難さが指摘される一方、患者の配偶者や家族に焦点をあてたわが国の看護研究の多くは、終末期患者の家族を対象に行われてきた。そのため、治癒をめざして治療を受けている時期にあるがん患者の配偶者が、病や治療についてどのように認知しているかについては明らかにされていない。そこで、患者の診断や治療に対するがん患者の配偶者の認知を明らかにすることを目的に研究に取り組み、平成14年8月28日～9月1日にイギリスのロンドンで開催された第12回国際がん看護学会で示説発表した。

研究の概要

本研究では、10名のがん患者の配偶者を対象に、入院中と退院後の2回にわたって、診断時と治療時に分けて、病気、患者、生活に対してどのように考えているかについて半構成的面接を行った。配偶者を対象にした研究であるため、対象者のみならず入院治療を受けている患者の意思も尊重する必要があると考え、患者の同意を得た後に配偶者に面会し、研究の主旨を説明して同意を得た。

対象者の平均年齢は59.1歳であり、女性が6名を占め、半数が職業をもっていた。すべての患者は、関東のがん専門病院で治療を受けており、胃がん、乳がん、卵巣がん等の診断を初めて受け、手術療法、化学療法、放射線療法をうけた者であった。

面接の結果、配偶者の病や治療に対する認知は、『病状の意味』と『人生における病の意味』の2つにまとめられた。前者が、疾患の原因や進行度、治療効果を評価した結果であったのに対し、後者は、夫婦で歩む人生にもたらされた病の意味を模索した結果であった。

『病状の意味』には、【疾患の原因】【病状の深刻さ】【治療効果】という3つの側面があった。【疾患の原因】は、病前の生活を評価して得られたもので、配偶者はがんの原因を“ライフスタイル”や“健康管理のありかた”などと意味づけた。また、【病状の深刻さ】は、がんの進行度や再発・転移の可能性について評価して得られたものであり、【治療効果】は、治療の成果である治癒の可能性、治療後のクオリティオブライフなどを評価して得られたものであった。特に、【疾患の原因】については、複雑なメカニズムをもって発症する疾患であるにもかかわらず、「健康管理は妻の責任なのに果たせなかった」「すべてを妻任せにしてきたことがストレスを与えた」と、強い罪責感とともに語られた。

『人生における病の意味』は、『病状の意味』が配偶者自身のなかで意味付けされた後に吟味され、意味付けられるものとして語られた。“運命の意識”“人生における新たな挑戦”“成長の機会”と、がんの診断や治療が新たな生き方や人生観を構築しようとする夫婦の【転換点】になったことが語られた。また、“成長の価値”“健康の価値”“日々の生活の価値”など、病により【価値の発見】がなされていたことが語られた。【価値の発見】は、日常生活で見失っていたものの価値が、がんと診断され治療を受けることで、はっきりと浮かびあがってきたことを意味していた。『病状の意味』が、病気に焦点を

* 日本赤十字広島看護大学 nomura@jrchen.ac.jp

あてて過去と現在を結び付けていたのに対し、『人生における病の意味』は、病と共に生きる未来への注目を意味するだけでなく、過去、現在、未来が一筋につながり、人生という大きな視点で病の体験を俯瞰している様子が語られた。

しかし、がんを人生に照らして意味付けるに至る過程は困難なもので、配偶者は、病気にさせたという罪責感と誰にも相談できない孤独感に苛まれてもいた。患者とは病気やお互いの感情について率直に話すことは少なく、患者の様子を見ながら、その体調や思いを推察して意味付けていたことが示された。

国際学会の意義

国際がん看護学会は2年に1度開催され、参加者は臨床の看護師、研究者、学生、大学の教員と幅広い。発表されるテーマも“エビデンスの構築”“倫理”“予防”等多岐にわたる。しかし、学会のメインテーマとして掲げられてきた“Making a difference”に現れているように、がん看護に何らかの変革をもたらすことをめざした学会であるといえる。第9回もイギリスのリゾート地ブライトンで行われた。企業の出展するブースが減った今回は、こじんまりした印象を受けた。しかし、民族衣装を着たアフリカやアジアからの参加者と、がん看護研究の著名な研究者たちを身近に感じられ、質素ではあるがあたたかく、その内容は一層充実したように感じた。

特にこの学会では、教育講演や多様なワークショップが行われており、参加者のニーズにあわせた学習の機会が提供されている。今回は、教育講演として喫煙と倦怠感がとりあげられていた。特に、倦怠感に関する研究の第一人者であるPiper博士が、幅広い研究成果を概観し、研究の動向と今後の展望について話されたのが興味深かった。また、研究能力を養う機会としては、基礎から上級の数グループに別れ、大学教員がファシリテーターとなり、研究計画を立案するワークショップが行われた。研究の基礎から、国際的な共同研究までをサポートするワークショップが行われていることは、研究者の育成だけでなく、臨床の実践家にとって研究を身近なものにする効果があることを実感した。

しかし、国際学会に参加することの最大の意義は、同じ関心をもつ諸外国の人々との交流にあると考える。特に研究成果を発表することの意義は、異なる文化的背景を有する人との交流を通して、わが国の独自性を知ると共に、文化を超えた共通点を見出す

ことにつながると筆者は考えている。

今回の発表においても同様で、病の意味について語り合うことの少ない夫婦関係については、いくつかのコメントいただいた。欧米におけるがん看護研究は、わが国が終末期に関する研究が多いのに比して、治療期にある患者や配偶者を対象とする研究が多い。そうした成果の中には、疾患について語りあえるオープンなコミュニケーションの意義が必ずといっていいほど強調されており、互いを思いやっても、言語化して話し合うことの少ない日本的なスタイルは、欧米の人々には不思議なこと、あるいは改善点と捉えられたようだった。

研究過程においては、自己主張しあうことよりも互いの立場を察して対応するわが国の文化を考えると、夫婦で話し合うより察しあうという対象者のコミュニケーションスタイルは至極当然なもののように思えた。研究対象者自身も孤独感を感じる一方で、自然なスタイルと評価していた。しかし、会場で、つたない英語で話し合ううち、この結果を文化的差異と捉えて尊重するだけでいいのかという疑問も湧いた。医療の発展とともに、がん患者の選択肢は増え続けていく。医師も患者に自己決定を求め、それを尊重するようになっていく。がんに関する情報はあふれ、がん患者は、それらの情報を理解し、多くの意思決定を行わなければならない。率直に語り合い、最善の道を選択するために、患者とともに考える身近な存在として、配偶者が果たす役割が重要なのではないかという指摘を受けたのである。そう考えると、従来の言語化せず察しあう夫婦間のコミュニケーションスタイルを文化的な特徴とだけ捉えていいのか、何か新たな方向性を模索する必要があるのではないかという疑問が湧いた。がん患者とその配偶者に必要な援助について、文化を尊重しつつ、激変する医療状況に即した援助を考えることの重要性とその方向性を考えるヒントを得た学会であった。

おわりに

欧米の後を追うように変化していく我が国の医療状況を考えると、欧米の実践家や研究者と交流を持つことは、我が国が歩むべき道について示唆を得る機会が多い。将来起こり得ることを知ることで、それに対処しつつ前進できるということが、後を追う者のアドバンテージになる。そのアドバンテージをいかすために、また、わが国の文化を深く知るためにも、国際学会に向き、多くの人々と交流をもつことは意義深い。国際がん看護学会での発表を通

して得られた示唆をいかし、今後も研究活動を発展させていきたいと考えている。

本研究にご協力くださいました対象者ならびに関連施設の皆様に深く感謝いたします。また今回の発表は、日本赤十字広島看護大学海外旅費助成を受けて行いました。このような機会を与えてくださいました本大学に深く感謝いたします。

引用文献

Northouse, Laurel L. et al.: Adjustment of women and their husbands to recurrent breast cancer, *Research in Nursing & Health*, 18, 515-524, 1995

保坂隆：がん患者の家族への心理療法的介入, *精神療法*, 23(5), 452-458, 1997.